ない方が、その人の利き眼だ。そして、視差とは、そのブレのことだ。

X氏が部屋の気配に感じたものは、視差のブレに似ている。普段は、まったく気付かない類のものだ。眼にどうして、視差があるかわからないように、部屋の気配が変わってしまった理由は、X氏には理解できない。

ただ、訳もなく、強い力に押しあげられ、自分が移動し、勝手に変貌しているとX氏は思う。仕事が、妙に、いつもより簡単に思え、今まで1日かかっていた分量が半日で終ってしまった。わかりきったことを、わかりきったように話している声をきくと苛立ちが増した。なぜだ？　恥かしくないのか、その声は。X氏は、攻撃的になっている自分を発見した。脳のR領域の働きが、急に、活性化したとでもいうのだろうか。恐竜たちが人間に残してくれた攻撃本能が、X氏を刺激しているのだろうか。

X氏は、心の昂ぶりを感じながら、おどろくほどのスピードで作業を進め、いったい自分のどこに、これだけの力が眠っていたのかと驚きながらも、なぜ、自分が急いでいるのか、知ることが不安だった。X氏の眼は力で張りおそろしいほど美しく輝やきはじめていた。

声は、明瞭で、よく響き、急所を突き、矛盾や混沌とは一切縁がなく、頭は透明に澄み、思考は精妙な織物となって紡ぎだされた。X氏はエネルギーの塊りだった。触れば、発火して、火傷を負い、眼は燃え盛る炎だった。X氏自身は、自分の眼が、いつのまにか、鋭い鳶色に輝やきはじめた

ことを知らなかった。あらゆるものを透視しても、なお、あまりあるおそろしいほどよく光るX氏の眼だった。

7

大風が吹いた。

真夜中のことだった。日中の、心のおそろしいばかりの昂ぶりが火照りとなって、そのまま夕方から夜へと尾をひき、X氏は、無言で、凝っと椅子に坐ったまま、まんじりともせず、たったひとつのことだけを考えていた。もう何千回も考えたことだったが、ある地点までくると、まるで、思考が特異点に衝突するみたいに、弾きかえされて、1歩も前へすすめなくなってしまうのだ。今夜は、異常なほどの集中力があって、いつもの地点を突破できるような気がして、そのたったひとつのことを考えはじめた。自分が完了するまでには、どうしても、挑戦して、カタをつけたかった。未知の領域に、まったくあたらしい私が顕現する瞬間を見ること。

深夜の闇があらゆるものを地の底に沈めている。雨音がない。寂寥だけが世界を制している。頭の芯は澄み、沈黙が巨大なひとつの音となってひろがり、思考の糸はその限度までのびていく。耳鳴りも止んでいた。

不意に地の底から湧きあがるような音が流れてきた。電線が鳴っている。樹木の揺れる音がす